

七尾城跡

16世紀初めに七尾城が建てられた際、この城を落とすことはできないと考えられていました。この城は、能登畠山家の居城でした。能登畠山家は、14世紀末から16世紀まで能登半島を統治しました。この城と防備は、16世紀前半に建設されましたが、正確な日付は不明です。七尾城は、城山(300メートル)の山上を覆い、南北2.5キロメートル、東西1キロメートルに広がっていました。

複雑な力関係

山の尾根には、多数の囲いが設けられていました。これらは、急な崖と谷による、自然の守りを備えていました。さらに、土塁、石垣、堀がそれを補っていました。七尾城内は、小さな町のように機能しました。垣で囲われた土地には重臣たちがおり、倉庫、寺、武器庫、また馬場がありました。重臣たちの屋敷は広く、その規模は、畠山家内で重臣たちが掌握していた力の大きさを示していました。16世紀半ばまでには、7名の重臣の一団が、畠山家に関わる事項を管理し、実質的にこの地域を支配するようになりました。数世代にわたって、家臣たち間の対立は深まり、主君への忠誠心は揺らぎました。

印象的な城の跡

ここを訪れて、城の敷地に残されたものの間を歩くと、この城が16世紀にはどのような姿だったかが感じられます。攻撃者の足を止めるために人が掘った谷には、現在、橋が渡してあります。杉の森の中

を曲がりくねって通る小道の片側には石垣が並び、もう一方の側には危険な斜面があります。防御のための2つの構内、二の丸と三の丸の間には、もう1つの人口の谷があります。今でも、この城の敷地に水を供給していた数々の井戸を見ることができます。周辺の表示板は、歴史的な記録と発掘調査に基づいて、この城が16世紀にはどのような姿だったと考えられるかを示しています。

本丸は山の頂上にあり、七尾湾の向こうまで眺めることができます。本丸は、畠山家の家臣の屋敷の防御と囲いによって、十分に守られていました。七尾城は、おそらく平屋の木造建築物でできていたと思われます。当時の建物は1つも残っていませんが、石を組み合わせて堅固に築かれた周囲の石垣の一部は、そのまま残っています。

包囲された城下町

七尾城の防御力は、弱点にもなりました。この城は外部から完全に遮断することができたのですが、城の出入りができず、包囲される可能性もあったのです。1576年と1577年の数か月間、武将・上杉謙信（1530～1578年）は、日本海沿いの諸国を征服する作戦において、七尾城を包囲しました。謙信は、1577年の秋、ついに七尾城の防御を破りました。城内にいた武士と市民の一部は、包囲されている間に、病によって衰弱しました。畠山家の重臣の1人である遊佐続光は、ひそかに謙信を支持し、畠山家に敵対したことが示唆されています。続光は、筆頭家臣であった長統連を殺し、七尾城の門を敵のために開いたと言われます。畠山家は、織田信長（1534～1582年、日

本を自らの統治のもとに統一すべく戦った有力な武将) に助けを求めましたが、その助けは間に合いませんでした。

放棄された城

上杉謙信は七尾城を手に入れましたが、翌年の春に亡くなりました。謙信の死後は、織田信長が能登半島と七尾城の支配権を握り、1581年にこれらを家臣の前田利家(1538～1599年)に与えました。利家は、七尾城の防御をさらに強化しましたが、七尾港により近いところを本拠地としました。交通や統治のうえで、そのほうが便利だったのです。七尾城は1589年に放棄されましたが、利家が追加した城壁の一部は今もそのままです。

七尾城が放棄された後、その周辺の杉の森は保存され、七尾城周辺の当時の雰囲気をとどめています。本丸跡には石段が通じています。本丸跡には、畠山家の子孫が1934年に神社を建てました。本丸跡からは七尾市が望めます。

本丸への石段から少し歩くと、駐車場があります。訪れる人は、山のふもとから本丸まで歩くこともできます。この道は、七尾城史資料館の近くから始まり、1時間ほどかかります。